

平成元年 1989年 創刊 No.437

# 月刊ウィーン

GEKKAN-WIEN 2026年10月号



Albrecht Dürer Feldhase, 1502 25 × 22,5 cm, Aquarell und Deckfarben, Pinsel, mit Deckweiß erhöht © ALBERTINA, Wien

## 杉本純の原子力の話 II

### ウィーンと京都 No.170

杉本純（東京科学大学特任教授 元京都大学教授 元原子力機構ウィーン事務所長）

東京科学大学が代表校を務める大学連合では、IAEA（原子力国際機関、本部はウィーン）に北海道大学博士課程1年及び東北大学修士課程1年の学生を10月1日から来年2月26日までの5ヶ月間派遣する予定で準備を進めて来た。また、OECD/NEA（経済協力開発機構 原子力機関、本部はパリ）には、福井大学修士課程2年の学生を9月1日から来年2月26日までの6ヶ月まで既に派遣中である。

IAEAに派遣予定の北海道大学及び東北大学の学生に対して、昨年度の国際機関派遣学生の経験・教訓を伝えるとともに、派遣前の注意事項を確認する目的で9月17日にオンラインの面談を実施した。面談には、昨年度IAEAに派遣された岡山大学博士課程3年および東京科学大学修士2年、さらに、OECD/NEAに派遣された京都大学博士課程2年の学生も参加した。昨年度に派遣された学生3名から派遣部署、主な研修内容、得られた体験や教訓等話をしてもらい、今年度IAEAに派遣される学生2名から、派遣前の準備状況、気になることや心配なことなどについて自由討議の形で話してもらった。昨年度の派遣者からは、基本的な心構えとして、何か一つを成し遂げること、何事にも積極的に取り組むこと、コミュニケーションの重要性、英語は少々分からなくても心配ないことなどのアドバイスがあった。持参すると良い服飾・食品や便利なアプリなど、かなり具体的かつ詳細なことまでにも話は及んだ。今後は毎月1回、オンラインで個々に面談してフォローするとともに、派遣学生からは毎月報告書を提出してもらうことになっている。

一方、OECD/NEAに派遣された学生とは9月24日にオンラインで面談を実施した。パリでの生活の立ち上げ、研修内容、職場での上司や同僚とのコミュニケーション、今後の研修予定、住居周りや通勤時の安全性などについて確認した。概ね順調かつ安全にインターンシップ研修をスタートしている様子なので安心した。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、暮らしの文化十二景（その2）として、両市の伝統工芸と職人を紹介したい。ウィーンでは、旧市街を中心に陶磁器やガラス工芸、銀細工などの伝統工芸が今なお受け継がれている。とりわけハプスブルク家の宮廷文化に育まれた工芸品には、優雅さと精緻さが息づき、現在も工房や老舗店で職人たちが技を磨いている。かつて皇帝や貴族のために作られた品々は、時代を超えて市民生活にも浸透し、芸術と実用品の境界を越えた独特の文化を形成してきた。アウガルテンなどの工房を

訪れると、伝統を守りながら新たな感性を取り入れる職人たちの姿に出会うことができる。

一方、京都では、西陣織、京友禅、清水焼、京扇子など、多彩な伝統工芸が古都の暮らしを彩ってきた。千年以上にわたり都として栄えた京都では、宮廷文化や茶の湯、寺社文化と結び付いて高度な職人技が育まれた。西陣織の華麗な織物や京友禅の繊細な染色は、その代表例である。さらに、一つの品を多くの専門職人が分業して仕上げる伝統も、京都のものづくりを支えてきた大きな特色である。こうした工芸品は美術品としてだけでなく、祇園祭などの祭礼や年中行事、日々の暮らしの中でも用いられ、人々の生活と深く結び付いてきた。今日も工房では熟練の技が受け継がれ、新しい時代に合わせた挑戦が続けられている。

ウィーンの工芸が宮廷文化の洗練を背景に発展したのに対し、京都の工芸は宮廷や寺社、町衆文化の中で磨かれてきた。歩んだ歴史は異なるものの、いずれも職人の手仕事によって都市の美意識を支えてきた点は共通している。工芸品に刻まれた技と心は、両市の文化の深みを今に伝える貴重な財産と言える。

余談であるが、ウィーン在住時には陶磁器やガラス工芸の店をよくウィンドウショッピングした。雅子皇后陛下が1993年のご成婚の際、アウガルテンの『マリア・テレジア』をお嫁入り道具にされたと伝えられており、私もそこで紅茶カップを購入した。京都では西陣織の美しさに見惚れたり、清水焼や京扇子を購入した。今月も両市の伝統工芸と職人を紹介することができた幸運に感謝しつつ、アウガルテン工房の写真を掲載させていただく。



パリのOECD/NEA本部



アウガルテン工房